



## Uターンして農と関わる

足立一日出<sup>1</sup>

今年も3月30日にツバメが我が家に帰ってきた。ツバメは東南アジアから日本に飛来する渡り鳥で、最近、ツバメの数が減ってきていると聞く。私の家では、昔から納屋などに巣を作って、雛が生まれ、9月頃には帰っていく。泥田が減り、帰ってきてすぐに巣を作っても、巣が落ちてしまうため、前年に作った巣を2~3ヶ所残している。最近では、農家の納屋も少なくなり、軒先でも巣を作らせない家が増えている。今年も、5月中に2ヶ所の巣から10羽の雛が巣立った。田に水が入れられ、代かきが始まる5月下旬に漸く古い巣の修理や、新しい巣を3ヶ所作り始めた。上手に泥を嘴にくわえながら、貼り付けている。現在、4ヶ所の巣で卵を温めている。旅立ちまでにまだ10羽以上生まれるだろう。

私も退職後、兵庫の実家にUターンして、農業の様々な場面に関わることとなった。農業をするにもトラクタなどを動かしたことがなかったので、兵庫県立農業大学校でトラクタの運転など、就農チャレンジ研修を受け、農業を始めた。同時に、縁あって(株)クボタに再就職の機会を与えていただいた。農業をしながら、3年間は農業機械メーカーに勤めた。仕事は、研究機関等で開発された技術の普及である。中でも、水田高度利用のための排水技術と土づくり(土壌の物理性)について、農家向けの機械の展示会や機械作業のデモ会場で話をしたり、職員向けの排水技術や土作りのガイドブック、農家向けのパンフレットの作成に携わったり、クボタの情報誌「U」の執筆等を通して、技術の普及に努めてきた。農業機械メーカーでは、土壌医検定(日本土壌協会)の試験を受け、2,3級合格を目指している人が増えていると聞く。勿論、資格を取り、仕事に役立てることも重要だが、その過程で、土壌に興味を持ち、土壌の知識を勉強し、習得することが大切だと思う。農業の課題を一緒に考え、技術開発から普及まで、農家に加えて産・官・学の連携が行われるようになることを期待する。

一方、私の家の農業は、水稻の種子生産と家庭菜園である。集落は兵庫県の種子生産地区の一つになっている。私も種子組合に所属して水田4筆でヒノヒカリの種

子を生産している。4筆と言っても平均1筆6aほどの小さな田んぼである。その他、家に隣接した3.5aの水田で家庭菜園、5m<sup>2</sup>の水田でカキ、クリ、イチジクを作っている。残り約10aの田んぼ2筆は、認定農業者に任せている。機械装備は、23PSのトラクタ、4条植えの乗用田植機、軽トラック、動噴、刈払機と小型の耕うん機である。稲刈りは、種子組合にお願いする。いわゆる機械化貧乏の例でしょうか。

北陸研究センター在籍中は、重粘土を対象に、排水対策と土壌の物理性の改善、ダイズの耕耘同時畝立て播種技術の開発に携わった。ダイズの耕耘同時畝立て作業ではないが、集落の多くの農家は、水稻の代かき直前の耕耘作業で、ロータリの爪の配列を変え、耕耘同時畝立て作業を行っている。土壌が旧河川敷の礫質水田土壌であるため、排水を良くするための畝立てではない。畝立ての目的は、少ない水を速やかに入れ、代かき作業を予定通り行うことと、畝を作ることによって代かき作業位置を確認するためでもある。しかし、畝立て後の代かき作業は、均平が難しいように思われる。加えて、畝が高くなると代かき後の土壌の硬さが畝の位置によって異なり田植の精度が悪くなると思われた。浮き苗が増え補植に手間取った。今年は梅雨入りしてから雨が降らず、水が少なく、特に、末端でしかも旧自然堤防上にある私の田んぼは、6月12日に代かきを終えたものの、乾いて亀裂が入り、とても田植のできる状態ではなかった。上流の農家にお問い合わせすると、「上流優先です。雨の少ない時には下流は雨があるまで難しい。」とまで言われた。昔からの水利慣行が未だに続いている。田植だけでもと言って漸く水を流してもらった。6月16日、田植が無事終わり、ホッとしているが、やしない水も流れてこない。早く雨が降るのを期待している。除草剤をまいても、除草剤に書いてあるような水管理は殆どできない。雑草との戦いが始まる。種子場であるため、最後は、数回、田んぼに入ってヒエや草を取る事となる。大雨の予報が出ている。気象変動を直に感じている。

家庭菜園では、トマト、キュウリ、ナス、イチゴ、タマネギ、スイカなど少量ずつ多くの野菜を栽培している。多い時期には17種類の野菜が同時に植わっている。不

<sup>1</sup>元(独)農研機構 中央農業総合研究センター 北陸研究センター  
2017年6月22日受稿 2017年6月26日受理

揃いのものばかりで、とても出荷できるものではないが、自家用としては十分な出来で、食べられるまでに生育するとすごく嬉しい。中でも、イチゴは、家庭菜園の3分の1くらいの面積を占め、500株くらい作った。甘くて美味しい。親戚や知人に送り、大変喜ばれた。残りは、イチゴジャム、冷凍や乾燥して保存食としている。色々な種類の野菜を栽培しながら、それぞれの播種、移植時期、肥料、病・虫害対策など、農家は、様々なことを幅広く知っていなければならない。しかも、気象条件に大きく影響を受ける。マニュアルはあっていないようなもので、気象の変化に対応できるよう次の一手を考えておかなければならない。あるいは、来年また頑張ろうと慰める。初心者である私は、周りの農家の様子を見ながら、教わりながら、四苦八苦している。

10 a程度の不整形な水田が多く、昔からほ場整備の必要性は言われてきたが、反対される人が多く、これまで行われなかった。私の田んぼも水口はあるが、水尻はない。そのため、排水は自然に水がなくなるまで待つ。大雨が降った時は、隣の他人の田んぼに水が溢れて出る。集落では、跡継ぎが少なく、後継者不足になっている。これまで、ほ場整備に反対された昭和1桁生まれの人が、80歳を越えて高齢化して農業をリタイアされ、反対される人も少なくなり、Uターンして2年目の集落の総会で、ほ場整備が提案された。私も、推進委員の1人に選ばれ、ほ場整備を進めることとなった。ほ場整備は、担い手に農地の集積、集約化を図ることによって、補助金を貰い、実質の事業費の農家負担を減らすことができる。担い手は、認定農家が1軒あるだけで、集落の水田の半分近くを担っているが、多くは難しい。そこで、ほ場整備を機会に集落営農組合を立ち上げることとした。ほ場整備は経営体育成等促進を目的とした農業競争力強化基盤整備事業（県営）である。集落のほ場整備計画地区の現況面積は、約116戸が所有する450筆、約35 haである。ほ場区画は、最も大きな田んぼでも、約30 aの田んぼが1筆あるだけで、多くは10 a前後である。所有も1.5 haを所有する農家が1戸あるだけで、多くの農家の所有面積は30 a以下で、小さな田んぼが分散している。事業参加者116名のうち、農家総戸数は61戸、半数近くは土地持ち非農家で、不在地主も17名いる。計画では、ほ場整備後、450筆の水田が71筆に減り、50 a以上の区画の水田が50%、30 a以上90%、最大区画約2 haの大区画水田となる。水稻中心の当地区では、作業効率の良い大区画水田に整備することとされている。小規模な所有の水田地帯を大区画化する場合、複数の農家（地権者）で水田1筆を所有せざるを得ない。戦後、農業が中心であった集落も、高度経済成長期には農村を離れた

り、子供たちは農業以外に就職をするようになる。そして、農業を担っていた人達は、高齢化で農業をリタイアし、あるいは、亡くなる。その結果、農地は、農業の場として子供が相続するのではなく、財産として子供達それぞれに分与され、農家の所有面積は小さくなっていったものと思われる。この機会に農地を手放したいという地権者も複数いる。しかし、農地を購入して拡大したいという農家は殆どいない。集落で1人いる認定農業者も兄弟2人で水稻中心の農業を行っており、借地や作業受託が中心である。特に、借地では殆どの家をお願いして管理してもらっているような状況で、借地料（地代）は払われていない。農地を購入しなければならない状況ではない。

ほ場整備では換地が問題になる。水田を評価し、評価をもとに換地される。農家はどこに換地されるのか心配である。日陰地や道路際などが換地の評価基準とされる。地力や排水条件などは評価には含まれない。それらは、ほ場整備によって改善されることとされている。旧河川敷でもあり、水田の多くは作土15 cm以下で、その下は礫層である。ほ場整備後、作土層の確保と、石の処理がどうなるのか心配でもある。できるだけ、地力や排水条件が満足されるほ場の整備が望まれている。

1筆の水田が複数の地権者になる時、耕作（利用）はどうなるのか心配になる。そこで、全国的に担い手のいない所で進められている集落営農を進めることになった。ほ場整備によって農地を地権者に集積し、主な担い手は認定農業者と、新しく作る集落営農組合とし、担い手に農地を集約化するようにした。農地の利用方法については集落営農組合に任せてもらうことを考えている。なお、現状では、認定農業者も集落営農組合に参加している。利用の調整は集落営農組合ですが、販売や経理は認定農業者と営農組合は別と考えている。

昨年12月、個別農家（事業参加の地権者、土地持ち非農家及び集落内の事業地区外の農家を含む）約120戸、農地面積約30 haの営農組合を立ち上げた。人・農地プランも出来上がり、ほ場整備事業は、国・県の認可を待つばかりとなっている。2 haの大区画から30 a程度までの幅広い区画で、イネ・ムギ・ダイズ（アズキ）と、野菜として、キャベツを作ることになっている。

家庭菜園で色々な種類の野菜を作るという老後の楽しみを経験しながら、一方で、耕作放棄田をなくし、担い手による生産性の向上を目指した大区画水田の整備計画を進めている。高齢化や担い手不足が進むなか、両立できるようなほ場の整備と農地の利用を考えなければならないように思う。